

「筌箱」

essere

「箱」

ドアが開いた。

「箱」から、一斉にあふれ出していく、
人。
ひと。
ヒト。

みんな、どこに向うのだろうか。
きっとロクなところじゃないんだろう。
きっとそうだ。

そのうちの1人と一瞬、目が合う。
全然知らないヒトだ。
でも、きっと、
今まで何度も会ったことがあるだろうし、
何度も目が合ったことがあるだろうし、
何度もこうやってすれ違っているヒトだ。

はじめまして。
さようなら。
僕はそう心で呟き、みんなが出た後の「箱」に入る。

右手に空いた椅子がある。
僕はそこに座る。

見上げると、頭上に「輪っか」がぶら下がっていた。
首を吊ってヒトが死なないように、頭が入らない大きさの「輪っか」がぶら下がっている。

突然、僕の目の前にヒトが立ち、その「輪っか」を引っ張った。
彼は、にやりと笑いながら言った。
「これを引っ張ると、世界が消滅するんだぜ」
同時に、ブザーが鳴った。
僕は、とてもワクワクした。

プシュー、ガチャン。

けれど、僕の1秒間の妄想は、ドアが閉まる音で現実に引き戻された。
追い討ちをかけるように、車内アナウンスが僕の望まない未来を告げた。

「次は、○×駅、○×駅」

僕を入れた鉄の箱は、今日もまた、敷かれたレールの上を走っていく。

<END>